

## 第一章 勝機は誰にもある

### ●勝負の土壇場では、精神力が勝敗を分ける

不利な局面でも諦めずに、粘り強く淡々と指していくことが、勝負のツボを見出すポイントになり、逆転に必要な直感や閃きを導き出す道筋になると信じている。

### ●勝負どころではごちゃごちゃ考えるな。単純に、簡単に考えろ！

固定観念に縛られたり、昔からのやり方やいきさつにとらわれずに、物事を簡単に、単純に考えるということだ。「キス(KISS)で行け」(”Keep it simple, stupid”)、簡単に、単純に考えることは、複雑な局面に立ち向かったり、物事を推し進めるときの合い言葉になる。そう考えることから可能性が広がるのは、どの世界でも同じであろう。

### ●知識は、「知恵」に変えてこそ自分の力になる

定跡は、ただ記憶するだけでは実践ではほとんど役に立たない。そこに自分のアイデアや判断をつけ加えて、より高いレベルに昇華させる必要がある。膨大な量の情報や知識に溺れるのではなく、まず、“自分の頭で考える”ことが先決だと思う。また、定跡は必ずしもいつも正しいとは限らない。鵜呑みにしないで、もう一度自分で、もう一度自分で、自分の判断で考えてみるのが、非常に大事である。

将棋を通して知識を「知恵」に昇華させるすべを学んだが、その大切さは、すべてに当てはまる思考の原点であると思っている。

### ●勝負には周りからの信用が大切だ。期待の風が後押ししてくれる。

将棋にかぎらず、勝負の世界では、多くの人たちに、どれだけ信用されているか、風を送ってもらうかは、戦っていくうえでの大きなファクターであり、パワーを引き出してくれる源である。

## 第二章 直感の七割は正しい

### ●プロの棋士でも、十手先の局面を想定することはできない

「将棋を指すうえで、一番の決め手になるのは何か？」と問われれば、「決断力」と答えるであろう。

将棋のプロはたくさんの手が読め、先のすべてを見通して一手一手指していると思われがちだが、実際にはそうではなく、十手先の展開も読めない。そういう五里霧中の中で、一つ一つの決断をしていっている。

いつも、決断することは本当に難しいと思っている。経験を積み重ねていくと、さまざまな角度から判断できるようになるが、経験によって考える材料が増えるほど正しい判断ができるようになるかという、必ずしもそうはいかない。将棋にかぎらず、考える力というのはそういうものだろう。将棋を通して、そういう人間の本質に迫ることができればいいな、と思っている。

### ●データや前例に頼ると、自分の力で必死に閃こうとしなくなる

#### ・直感の七割は正しい

人間の持っている優れた資質の一つは、直感力だと思っている。将棋では、たくさん手が読めることも大切だが、最初にフォーカスを絞り、「これがよさそうな手だ」と絞り込めることが、最も大切だ。それが直感力であり、勘である。直感力は、それまでにいろいろ経験し、培ってきたことが脳の無意識の領域に詰まっており、それが浮かび上がってくるものだと思っている。

・全体を判断する目は、大局観である

一つの場面で、今はどういう状況で、これから先どうしたらいいのか、そういう状況判断ができる力だ。本質を見抜く力といってもいい。その思考の基盤になるのが、勘、つまり直感力だ。直感力の元となるのは感性である。

将棋にかぎらず、ぎりぎりの勝負で力を発揮できる決め手は、この大局観と感性のバランスだ。感性は、読書をしたり、音楽を聴いたり、将棋界以外の人と会ったり…というさまざまな刺激によって総合的に研ぎ澄まされるいくものだと思っている。

●決断は、怖くても前に進むという勇気が試される

・決断は自分の中にある

将棋で大事なものは、判断であり決断である。決断するときのよりどころは自分の中にあると思っている。厳しい局面では、最終的に自らリスクを負わなければならない。そういうところでの決断には、その人の本質が出てくるのだ。

・決断とリスクはワンセットである

リスクを避けていては、その対戦に勝ったとしてもいい将棋を残すことはできない。次のステップにもならない。それこそ、私にとっては大なるリスクである。いい結果は生まれない。積極的にリスクを負うことは未来のリスクを最小限にすると、いつも自分に言い聞かせている。

・「できなかった」ことで、画期的な何かが起こる可能性

これまで、誰もが怖くて「できなかった」分野で画期的な何かが起こる可能性がある。「できなかった」というのは、それを諦めることではない。そこを避けて通ったり、ちょっと考え方を換えれば新しい方法が開ける。そして、何年かたつと、それがメジャーになって落ち着いてくるということも考えられるだろう。

●常識を疑うことから、新しい考え方やアイデアが生まれる

先入観や思い込みを持っていると、「違う手もあるのではないのか」「ゼロに近いことに挑戦しよう」という考えは思い浮かばない。「こんなのはあり得ない」と思うのではなくて、理解していこう、吸収していこう、試してみようという気持ちや姿勢を、これから自分自身でも大事にしていかななくてはいけない、と強く思っている。

### 第三章 勝負に生かす「集中力」

●深い集中力は、海に深く潜るステップと同じように得られる

・一気に深い集中力に到達できない

私が深く集中するときは、スキューバダイビングで海に深く潜っていく感覚と似ている。一気に深い集中力には到達できない。海には水圧がある。潜るときにはゆっくりと、水圧に体を慣らしながら潜るように、集中力もだんだんと深めていかなければならない。そのステップを省略すると、深い集中の域に達することはできない。焦ると浅瀬でばたきただけで、どうもがいていてもそれ以上に深く潜っていけなくなってしまう。逆に、段階をうまく踏むことができたときには、非常に深く集中できる。

●わき上がる闘争心があるかぎり、私は現役を続けたい

・自分自身の存在を確認する

私は、将棋を指す楽しみの一つは、自分自身の存在を確認できることだと思っている。人生は食事をして眠るだけのくり返しではない。「こういうことができた」「こういうことを考えた」という部分がある。それは楽しさであり、人生を有意義にさせてくれる。何かに打ち込んでいる人には、そういう発見があると思っている。

#### 第四章「選ぶ」情報、「捨てる」情報

●パソコンで勉強したからといって、将棋は強くなれない

・情報は「選ぶ」より、「いかに捨てるか」が重要

情報をいくら分類、整理しても、どこが問題かをしっかりとらえないと正しく分析できない。さらにいうなら、山ほどある情報から自分に必要な情報を得るには、「選ぶ」より「いかに捨てるか」のほうが重要なのである。

●最先端の将棋を避けると、勝負から逃げることになってしまう

・知識に自分の思考やアイデアをプラスする

確かに、今の人は、私が学んだ三年分、五年分の知識も一冊の本を読めば一気に詰め込むことができる。だが、私自身は、それを理解していく過程で、こうすれば早く習得できる、こうしたほうが理解が深まるという方法論を得ることができた。プロセスの中での思考力とか勝負への対処法などは、将棋を戦う戦術としては何の役にも立たないが、決断力や構想力、将棋についての考え方(大局観)を豊かにする糧になっているだろう。そういう知恵は、ぎりぎりの勝負どころで力を発揮する支えになってくれるものだ。

●創意工夫の中からこそ、現状打破の道は見えてくる

・何回か続けていけば、そのうちうまくいく

新しい戦型や指し手を探していくことは、新しい発見を探していくことである。自分の力で一から全部考えないといけない。だから、どうしても失敗することが多いが、次のステップ、未来への収穫になる。成功する可能性があるかぎり新しいことに挑戦していきたい。現状の打破はそこにしかない。その姿勢をいつまでも持っていられたらいいなと思っている。

●将棋は駒を通しての対話である。お互いの一手一手に嘘はない

・かつて「阿吽の呼吸」という言葉があった

お互いに日本語をしゃべっているから意思の疎通ができていて、というのは錯覚だ。かつて「阿吽の呼吸」という言葉があった。佐々木小次郎と宮本武蔵、勝海舟と西郷隆盛のように、日本人には瞬間的に心眼で相手を見抜く感性があった。今の日本人はそれを置き去りにしてしまったかもしれない。

本気で話し合う機会を持つことは、物事を前に進めるための基本ではないだろうか。最初から思い込みがあったら話は通じない。他人を理解できてこそ自分の意見も成り立つのではないか。

●将棋上達法—近道思考で手に入れたものはメッキが剥げやすい

・対局が終わったら検証し、反省する

将棋を上達するためにしてきた勉強法は、初心者のころも今も変わらない。基本のプロセスは次の四つ。

- 1) アイデアを思い浮かべる
- 2) それがうまくいくか細かく調べる
- 3) 実戦で実行する
- 4) 検証、反省する

この四つのプロセスを繰り返していくことが、力をつけるポイントだと思っている。将棋だけではなく、勉強や物事を進めるときにも大切なポイントではないだろうか。自ら努力せずに効率よくやろうとすると、身につくことが少ない気がしている。近道思考で、簡単に手に入れたものは、もしかしたらメッキかもしれない。メッキはすぐに剥げてしまうだろう。

●コンピュータの強さは、人間の強さとは異質なものだ

たとえコンピュータが必勝法を見つけ出したとしても、それを人間が理解することはできないだろう。だからそんなことよりも、面白い将棋を指したい。楽しい将棋がいい。まだまだ広がっている未開の地平を開拓していくような、そんな将棋を指し続けたいと思っている。

**第五章 才能とは、継続できる情熱である**

●才能とは、同じ情熱、気力、モチベーションを持続することである

一つのことに打ち込んで続けるには、好きだということが根幹だが、そういう努力をしている人の側にいると、自然にいい影響が受けられるだろう。さらに、ペースを落としてでも続けることだ。無理やり詰め込んだり、「絶対やらなきゃ」というのではなく、毎日、少しずつ続けることが大切だ。

●「真似」から「理解する」へのステップが創造力を培う

先駆者の航路を真似て、その過程を理解することで、すでにできている航路から少し離れたところを見て、自分の航路を考えられようになる。「真似」から「理解する」レベルになると、先駆者の考え方が「ああ、そういうことだったのか」とわかるようになり、それはすごくうれしいことだ。個人のアイデアは限られている。何かをベースにして、あるいは、何かをきっかけにしてこそ新しい考えがいろいろ浮かぶ。「真似」から「理解」へのステップは、創造力を養う基礎力になるのだ。

●将棋の歴史には、日本が誇れる知恵の遺産がある

俳句や短歌にも共通するように、将棋にも省略の文化がある。日本人は、物事を省略し、新しく創造し直す才能に恵まれているのではないだろうか。将棋のルールは将棋を面白くし、奥行きを非常に深くしている。このルールは一人の人間が決めたのではなく、いろいろな人たちが「こうしたら面白くなるのじゃないか」とアイデアや意見を出し合って今の形にしたのである。日本人の中には無名だが、そういう知恵を持った人たちがいるのだ。その長い歴史として、非常に洗練され、奥深い今の将棋がある。私は、そういう昔の日本人の発想に感心するとともに、世界に誇れる知恵だと思っている。それは、遺伝子として今の日本人にも脈打っているはずだ。その知恵に誇りを持っていい。